平成２２年度中学生・高校生の国際理解・国際交流論文
高等学校の部最優秀賞

「フィリピンの子どもたちの今
～日本とフィリピンの比較～」

福島県立白河旭高等学校　３年　坂本　美波

私は、先進国と発展途上国の教育格差の問題に興味を持っている。途上国が発展できない理由の一つに教育が関わっているのではないかと考えたことがきっかけだ。先進国の子どもたちは、整った教育制度のもと様々な分野の知識を身に付けることができる。それに対し途上国では学ぶ意欲があっても、教育制度が未整備であったり、貧困が原因で教育を受けることができないのが現状である。しかし、私は同じ人間として教育を受ける機会が均等に与えられるべきだと考え、日本とフィリピンの違いを例に挙げながら論じていきたい。

夏休みにＪＲＣのボランティア活動の一環としてフィリピンへ研修に行き、そこで貧困層の人々に給食ボランティアを行ってきた。子どもたちの学習意欲や学習時間にどのような差があるのか疑問に思っていた私は、この研修の機会を利用してアンケートを実施した。対象は小学６年生、１００人であり、それ以前に日本の小学校（出身校）でも同じ質問内容でアンケートを実施した。この結果をもとに論じたい。

まず、問１で「勉強は好きか」という質問をした。日本では「好き」と「嫌い」がほぼ五分五分になったが、フィリピンでは全員が「好き」という結果であった。私は、実際にフィリピンの学校を７校訪問したが、どこの学校に行っても日本では見られないような学習意欲の高さを感じた。同じ学習意欲というテーマに関連して学習時間にも大きな差があった。問２の「学校以外での学習時間」を質問したところ、日本では「０分」が３人いて、「１時間以内」が９１人とほとんどを占めたのに対し、フィリピンでは「０分」がいなかったうえ、「４時間以内」が７４人、「４時間以上」が１６人であった。両者の回答にはあまりにも差がありすぎた。このことからも両国の学習意欲の差がはっきりとわかる。どうしてこんなにも差が生じるのだろうか。私もその一人だが、日本の子どもは何の不自由もなく６才から学校教育を受けてきた。その数年間の中で何度、教育を受けられるありがたさや、勉強する意味を考えるだろうか。そう多くはないだろう。私自身、小学生の頃、そんなことは考えていなかった。フィリピンの現状は、子どもの数に対して校舎と教師の数が足りていないため、時間や曜日ごとに分けて授業が行われている。あんなに勉強したがっているのに十分な環境が整っていないために満足に勉強ができないのだ。このような教育の環境で育っている子どもたちなら、日頃から少しでも勉強ができることに感謝しているに違いない。また、学校で習うことが少なかったとしても、その分を家で補っていることが家庭学習時間の長さから推測できる。

次に、同じような結果が出た質問項目もある。問３では「今の勉強が将来に役立つと思うか」を尋ねた。日本の子どもの大部分とフィリピンの子どもの全員が「将来に役立つ」と思っているという結果が出た。私は、両者とも半々の結果になると予想していたので驚いた。また、この結果に問１と問２を合わせて考えてみると、日本では勉強は嫌いだが役立つと思って、きちんと学習時間を確保している子がいることがわかる。一方、フィリピンでは将来に役立つ勉強を好んで取り組んでいる。目的が同じでも、モチベーションが違っていては勉強の定着度にも差が出ると思われる。日本の子どもは、学習するのに申し分ない環境にいるのだから、より多くのことに興味を持ち、知識を得ることに貪欲になることが望まれる。

さらに注目すべき点として、「世界の中で、学校に通えない子どもについてどう思うか」という問いで、フィリピンの子どもは全員「かわいそう」を選んだのに対し、日本の子どもの８人が「無関係」を選んでいる。こうした考えの子どもがいる現実は、とても悲しく感じられる。どうして情報が溢れるこの日本で、子どもたちがこのような考えを持つのだろうか。私は現代の日本の子どもに想像力が欠如しているからだと思う。想像力がなければ、相手の気持ちを考えることはできない。したがって、相手のことを考えずに平気で「無関係」と回答する子どもがいるのだ。私は、想像力を育むためには読書が必要だと考える。本を読んでいるうちに自然と登場人物の気持ちを考えることができるようになり、その結果として想像力が鍛えられるのではないかと考えている。

今回のアンケートの結果では、日本の子どもとフィリピンの子どもとで大きな差が現れた。そして、彼らを取り巻く環境が大きく影響していることがわかった。さらに、現在の発展途上国では、やる気のある子どもに十分な勉強をさせてあげられないのが現状なのだ。マニラのゴミの山に暮らす、学校に通っていない子どもたちは皆、「勉強がしたい。」と言っていた。私たちが何か話したり、行動する度にキラキラした瞳で私たちを見ていた。私は、今でもその瞳の輝きを忘れることができない。このような経験から、どんなに国が貧しくてもすべての子どもに教育を行き渡らせ、自分の手で格差を小さくしたいと強く感じた。具体的には私が国際機関（ＪＩＣＡ）の一員として、実際に発展途上国で教壇に立ち、子どもたちに教えることから始めたいと考えている。発展途上国の教育の問題は大きな問題だが、小さなことを積み上げていけば、やがて解決につながっていくと考える。